

氏 名（本 籍）	後藤美緒
学 位 の 種 類	博士（ 社会学 ）
学 位 記 番 号	博 甲 第 7174 号
学位授与年月日	平成 26 年 12 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	東京帝大新人会と戦後日本—知識人のライフコース的研究—
主 査	筑波大学教 授 博士（人間科学） 土井隆義
副 査	筑波大学准教授 樽川典子
副 査	筑波大学准教授 博士（社会情報学） 野上 元
副 査	京都大学教育学研究科教授 博士（教育学） 稲垣恭子

## 論 文 の 要 旨

本論文は、東京帝大新人会の思想と実践の往還関係に注目して、会員たちの著作物、機関紙、回顧録などの分析をとおして実証的に考察し、新人会に固有の精神構造が形成される過程とその維持を析出した研究である。新人会員たちの戦前と戦後を断絶したものと理解するこれまでの研究にたいして、著者は、戦後の活動を詳細に分析し、その精神構造が知識人の戦後の活動にも色濃く投影していること、戦前—戦後の人生の連続性がみられることを解明して、あらたな局面をひらくことに成功した。

本論文は序章、終章をふくめ8章で構成されている。

序章では、本研究の問題関心を提示したうえで、先行研究の整理と分析視角の提示がおこなわれる。先行する研究の検討では、新人会員の指導者性をの過度に強調する傾向、思想と実践の往還関係にめくばりする認識の欠落、戦前—戦後の連続性に関する検討の不足という3つの課題があることが指摘される。これを解消するためにライフコース研究の視座が選択され、新人会員のコーホート・歴史的出来事・人生の関連を確認し、政治・経済・社会・文化の諸側面で大きな変動期に青年期を過ごし、この事実が彼らの人生を大きく規定していることを示す。そのうえで、以下の分析で採用すべき3つの着目点が提示される。それらは①近代日本における学問と社会、②近代における大衆と知識人の関係、③メディアと文化創造である。

第1章「戦間期の青年と結社」では、二つの作業をつうじて新人会の特徴が確認される。第1は、新人会の沿革と諸活動であるが、後者は、行為に注目して整理すると、①演説、②機関誌などへの執筆・翻訳・文芸雑誌への投稿、③読書、④医療、⑤その他に分けられる。加入率をみるかぎり、極めて小さな結社が大きな影響力を持ったことが新人会の特徴といえる。第2に、1920年代は自発的、強制的にさまざまな学生団体が組織されたが、東京帝大内外の結社を概観して比較すると、新人会はもっとも早い時期に創設され、他にくらべると10年あまりの期間、活動した組織の持続性がきわだち、活動が多様であり拡大していったことが、その特異性としてあげられた。

第2章「合宿という思想」では、結社としての特異性の起源を、新人会が営んだ「合宿」にもとめて考察が

おこなわれる。会員たちの執筆物にもとづいて、3つの合宿所での活動や空間的配置、運営の再構成をおこない、都市化によって出現した当時の下宿屋・寄宿舍との差異は、その固有な共同性にあることがあきらかにされる。それは機関誌の発行作業、帝大教授・社会運動家や労働者たちとの交流および読書会によって培われた紐帯にもとづくものである。合宿は、帝大生を新人会員として身体化する場であるとともに、諸実践を駆動させた論理や精神構造を形成する場であったが、筆者はそうして成立した共同性が、いくつかの重要な実践に結実していくと述べる。

その一つが、第3章「共同性を模索する読書実践」でとりあげられる読書という行為である。筆者は、新人会の読書が他者との差異化と卓越性の確保にあったというこれまでの理解を批判的に吟味したうえで、読書実践は、テキストを介した読者、執筆者、編集者による相互行為と設定する。労働者という読者をつうじて社会問題の現実を知った新人会員は、その経験にもとづいてテキストと現実の社会問題をすり合わせる読書へ移行し、他方でそれが労働者との読書実践を変える契機になった。新人会員にとって読書実践は、社会的属性をこえた平等性や新たな共同性を模索するための手段と位置付けられ、そのさい民衆とともに社会を改革する主体として自身をとらえる契機になった。そのかぎりにおいて読書実践は社会運動と意味づけられていたと指摘する。

第4章「帝大セツルメントの葛藤」では、帝大セツルメントの医療部の活動に焦点をあて学知と実践の再帰的な関係の解明し、「社会的なもの」の起源をみいだそうとする。具体的には、医療活動を遂行するなかで刊行したテキスト『医療の社会化』のタイトルの意味が、彼らの用いた「社会医学」と「社会事業」という二つの標語に着目して検討される。筆者によれば、「社会医学」は、患者たちの生活や労働環境、社会構造までを視野に入れて問題を解決する必要性と、従来の医学の限界を表わす。国家の整備しつつあった法の対象外にある人びとには、自主性の喚起がもとめられ、これを「社会事業」として捉えて活動していた。新人会の活動は国家や学知と対立や共振を含みつつも、国家や学知が補足しできない「社会的なもの」に関わっていったことが解明される。

つづく第5章、第6章では、おもに敗戦から1970年前後までの戦後期について、新人会での経験と理念との関連性を視野にいれつつ、ジャーナリズムで活躍した2人の事例を分析し、戦後の新人会に対して正反対の態度をとったかれらに通底する精神構造が検討される。

第5章「小説という記憶装置」では、中野重治と小説『むらぎも』がとりあげられる。筆者は、プロレタリア文学者という中野のキャリアの開始を新人会時代にもとめ、その時代を描く『むらぎも』（1954年）は社会の記憶と関連すると述べる。その根拠を示すために文体の社会学的検討をおこない、エピソードの積み重ねと、その各々に主人公の回想を挿入する技法が、現在と過去の連続性を示す試みであったという。さらに社会が大きく変動する1950年代、中野にとって執筆は、過去の出来事をいかに位置づけるかを自身と読者に問うていたことも提示する。こうした中野の活動と認識から、新人会時代について積極的に開示し、大衆に接近するという試みに戦前からの継続性がみいだせることが明らかされた。

第6章「『漫才作者』秋田実」では、秋田と彼の漫才制作活動が検討される。彼の漫才制作史を概観し、秋田を漫才とメディアの結節点という役割を果たした存在と位置づけ、執筆物や音声資料によって実証的な分析がおこなわれる。それによれば、戦前期の秋田は、ラジオ番組では漫才イメージの転換と聞き手の拡大を試み、現状批判の手段として雑誌を活用する。テレビが登場する戦後は、演芸場を活用した表現形式を開発するとともに、漫才作家の育成を目的とした研究会や雑誌刊行を手がけた。この分析によって解明された点は、漫才作家として秋田は、一貫して人びとの「世間話」にたいして強い関心をよせ続けたことである。人びとは漫才の聞き手としてだけでなく制作者にフィードバックする存在でもあることに気づいた秋田を通じて、大衆文化の創造に新しい回路が開かれた。秋田は、新人会あるいはその特性と距離をおいてきたが、人びとの生活に寄

りそして、漫才の方向性をともに創っていくライフコースを歩んだと結論づけられている。

終章では、先行する各章に通底する会員たちの意識の整理を改めておこない、新人会 of 精神構造の特徴が2つにまとめられる。第1に、彼らが「ヴ・ナロードへ」と呼びかけた、その「民衆」への志向性である。それはアカデミズムに基礎をおきつつ、直接的、間接的な相互作用をつうじて形成された意識・態度であり、新人会時代に形成されたその意識が、会員たちの生涯をかたちづけていた。第2に、新人会員たちの指導者性は、あからさまな権威に直結しない特徴をもつ。それは「民衆」に視点をむけつつ、思想と実践の往還関係をくりかえしたなかで、自己意識を変革してきた経験があつて可能になった振る舞いであつた。さらに、本論文が依拠したライフコース研究について、歴史的な出来事と個人の経験の関連に注目して人生を観察・記述していく有効性をみとめつつ、人びとを歴史の客体としてのみとらえる限界を指摘し、歴史や社会にたいする人びとの能動性を考慮するべきであると提言する。

## 審 査 の 要 旨

### 1 批評

冒頭でふれたように、本論文は東京帝大新人会 of 思想と実践の往還関係について、著作物、機関紙、回顧録などの分析をとおして実証的に考察し、新人会に固有の精神構造が形成される過程を析出した研究である。その精神構造が知識人の戦後の活動にも色濃く投影していること、戦前一戦後の人生の連続性がみられることを解明して、あらたな局面をひらくことに成功した。従来の知識人研究では、一方で政治的な思想の受容変遷のみに関心をよせて指導者性が強調され、他方では行為のみに関心をむけて、その意味を解釈するにとどまっていた。本論文は、両者の方法論的な限界を克服する視点を提示し、知識人と民衆との直接的、間接的な相互関係を契機とした自己の再帰性に接近する方法を工夫したことでおおいに評価できる。また、筆者が依拠したライフコース研究では、人びとを歴史的・社会的出来事の影響をうける客体として位置付けて実証研究がおこなわれてきた。これにたいして歴史や社会の客体としてのみ位置付ける限界を示し、その主体として把握していく可能性を提案していることも評価されるべきであろう。

しかしながら、本論文が十分な完成度に達しているということができない。その方法的な工夫、とくに準備された諸概念がもっとも効果的に使われているとはいいいがたい。また、新人会員の戦後史は多様であることを考慮すれば、異なるタイプの事例研究が今後の課題になろう。しかし、これらの諸点は、本論文の評価否定するものではない。専門研究者として経歴を始める著者に、その方法のいっそう洗練と残された仕事の取り組みを期待する。

### 2 最終試験

平成 26 年 11 月 14 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

### 3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（社会学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。